

「～ば」と「～たら」が連続して現れる複文の用例分析

—「問題・希望提示型」を中心に—

石橋裕子

キーワード：条件文、条件節の連続、条件形式の評価的用法、情報の重要度

1. 本研究の目的と背景

本稿は「～ば」「～たら」形式の条件節が一文中に連続して現れる文を分析し、その下位分類を示した上で、その分類の一つにおいて大多数を占める「問題・希望提示型」¹について、その特徴を詳しく説明するものである。

条件文の中には、時おり、次のように条件節が連続する文が見られる。

- (1) 頭が痛ければ、この薬を飲めば治る。
- (2) ドイツ語が習いたければ、あの大学に入れば講座が開講されている。

(1) では「頭が痛ければ」という条件節に「この薬を飲めば」という条件節が後続し、主節の「治る」がその後に続く。(2) では「ドイツ語が習いたければ」と「あの大学に入れば」という2つの条件節が連続し、主節に「講座が開講されている」と続く。このように条件節が連続する文はどのような構造を持つのだろうか。

言語学研究会・構文論グループ(1985a)は条件文の従属節と主節の関係を「条件づける出来事と条件づけられる出来事の関係」と述べている。寺村(1981)は条件文の最大公約数的な共通点として、「ある非現実の事態(P)の実現が、他のやはり非現実の事態(Q)をひきおこす引き金になるということを話し手が述べようとする表現」であることを挙げている。また、益岡・田窪(1992)は「ある事態と別の事態との依存関係」、赤塚(1998)は「条件用法とは、前件と後件によって表される事態の因果関係と考えられる」と定義づけている。いずれの研究も、ある事態と別の事態とが互いに因果的に関係づけられていることを指摘している。しかし、(1)(2)の最初の条件節が表す事態「頭が痛い」「ドイツ語が習いたい」という事態は、それぞれの主節の「治る」「講座が開講されている」という事態を引き起こしているとは言い難い。

条件文の分類、あるいは条件形式の意味、用法に関する研究は国立国語研究所(1964)、言語学研究会・構文論グループ(1985ab)、前田(2009)をはじめ、枚挙に暇がない。しかし、(1)(2)のような文については、実際に観察されるにもかかわらず、これまでほとんど議論されてこなかった。筆者が現代日本語書き言葉均衡コーパス(以下BCCWJ)で検索したところ、条件節が連続して現れる文は、1000例近く見つかった。本稿では、これらの文にどのようなタイプがあるのか、どのような意味的構造を持ち、また、いかなる要素が条件節の連続を許容しているのかを明らか

¹ これについては4.1節以降で詳説する。

にする。なお、ここではいわゆる「順接条件節」を「条件節」、「順接条件節」により構成される複文を「条件文」と呼び、議論を進める。

2. 条件節の複数出現に関する先行研究

文における従属節の複数出現について言及しているものに南（1974、1993）と花蘭（1999）がある。南（1974、1993）は従属句²をA～C類の3つに分けている。これらの類は内部にどのような要素もしくは成分が現れるかによって分けられ、それぞれ異なる階層に属するとされる。この分類によると、条件形式「～ば」「～たら」「～と」「～なら」はともにB類に属する従属句である。同研究は、同じ類に属する従属句は、次のように互いの従属句の中に含まれ得るとしている。

[[月末ニナレバ]_B新製品ガ入荷致シマスノデ]_Bソレマデオ待チ下サイ

しかし、条件節同士の包摂関係については例がなく、南（1974）が注釈で「『～バ』と『～ト』はお互いに他の中に含まれることはないようである」と述べているのみである。

花蘭（1999）は条件形式と評価的な用言からなる「～ばいい」「～なければならぬ」といった「条件用言」の表現を取り上げ、それらが語としてどの程度一体化しているかを「仮定副詞の共起」や「倒置可能性」などの複数の観点から観察した研究である。そして、語の一体化の論拠の一つとして、「一文中における同一の条件形の出現」を挙げている。

花蘭（1999）は、(3)のような文を取り上げ、同一の条件形式を持つ条件節は、基本的に一文中に複数出現しないが、(4)のような「～ばいい」や「～なければならぬ」などの条件用言や「例えば」などの慣用化した表現は「条件形式としての意味を失って」いるため、他の条件節との共存が可能であるという。

(3) ?明日雨が降ったら、学校が休みだったら、君の家に行くよ。

(4) …医者は需められれば直ちに応じなければならぬが、…（「華岡青洲の妻」）

なお、花蘭（1999）は同一条件形式を持つ条件節についてのみ、その連続が不自然だとしているが、(3)の条件形式のどちらか一方を「～ば」に変えてみても、やはり不自然さは払拭できない。この点は、同研究の条件用言の認定に関する主張には直接関係がなく、同研究の信頼性を覆すものではない。しかし、同一形式か否かに関わらず、条件節が連続する文の自然さ、不自然さには別の要素も関係していると言わざるを得ない。

3. 分析対象と用例の収集

3.1 分析対象

条件文を網羅的かつ詳細に分類した研究に前田（2009）がある。前田（2009）はリアリティーの観点から、条件文を条件的な用法と非条件的な用法に大きく二分し、さらに条件的な用法を仮

² 南（1974、1993）にしたがいここでのみ「従属節」ではなく「従属句」とする。

定的なもの事実を表す非仮定的なものに分けている³。

(5) 前田 (2009) による条件文の分類

- ・ 条件的用法
 - ・ 仮定的 (反事実条件文、仮説条件文)
 - ・ 非仮定的 (多回的 … 一般・恒常 / 反復・習慣)
(一回的 … 連続 / きっかけ / 発現 / 発見)
- ・ 非条件的用法 (並列・列挙 / 評価的用法 / 終助詞的用法 / 後置詞的用法 / 接続詞的用法)

本稿では、条件節の連続という現象の初期的な調査ということを考え、前田 (2009) の分類における仮定的な用法の条件文のみを対象として分析を行う。これは、同研究で仮定的な用法が条件文の典型として位置づけられているためである。条件形式の代表的なものとしては「～ば」「～たら」「～と」「～なら」などが挙げられるが、本稿では「～ば」と「～たら」の2つの条件形式を対象を絞った。この2形式は、仮定的な条件文で頻繁に出現する形式であるため、条件節連続の中心的な用法および特徴の輪郭を浮き彫りにするのに妥当な形式であるといえる。

「～と」は事実的な用法が中心であり、仮定的用法より事実的な用法で用いられることのほうが多い (益岡 1993、前田 2009) ため、対象から外すこととした。また、「～なら」には条件節と主節の時間的前後関係において一定ではない点 (鈴木 1994) で他の条件形式とは異なっていること、仮定世界での前件と後件の因果関係ではなく、談話領域での話し手の判断に基づく非因果関係を表す形式で、条件文の「非典型例」に多く現れるという指摘 (有田 1999) があることから、「～ば」「～たら」と同列に扱うことは避け、対象としない⁴。

3.2 「条件節の連続」の認定

「条件節の連続」とは、条件としての意味を失っていない2つの条件節が、他の従属節などにより断絶されることなく隣接しているものとする。これに従い、以下のものは本稿の分析対象である「条件節が連続する仮定的な用法の文」とはみなさない。以下に除外する対象とその例を示す。

A 2つの条件節の間が、接続助詞や動詞の連用形などで意味的に一度途切れているもの⁵

(6) 清算事業団は何年おいてくれるかわからないけど、いい仕事があればいくし、なければ自分で駆けずりまわって探すしかないね (鎌田慧「国鉄処分 JR の内幕」)

B 条件節の1つが他の節 (連体修飾節など) に入り込んでいるもの

(7) あの子の様子をきちんと見ていれば、〔根気強く教えれば理解できる子〕だとわかるだろ

³ 仮定的用法とは「彼女を失ったら、僕は自殺するかもしれないんです。」のような文、非仮定的用法とは「あたし、別れようと思って……お父さんに電話したら、反対されたのよ」のような文を指す (例はいずれも前田 2009)。非条件的用法とは、「A もあれば B もある」などの形で現れる「列挙・並列」、「～ばいい」などの「評価的用法」、「～すれば？」などの「終助詞的用法」、「～に比べれば」などの「後置詞的用法」、「考えてみれば」などの「接続詞的用法」を指す。

⁴ 本稿では「～ならば」形式も「なら」形式とみなす。

⁵ ただし、「(略) 砂像にスプレーする。乾いたら再度吹きつけて、三回くらい重ねれば、1週間くらいはゆうにもつ」(実著者不明「サンドクラフト入門」) の波線部分のようなものはひとまとまりの動作とみなす。

う。

C 前田（2009）において条件的用法の非仮定的用法に分類される条件文

(8) 生活苦から、暗くなってから門松を伐りに行き、サカキかと思つたら翌日立てたの見ればシキミだったと、…（略）（斎藤たま「行事とものけ」）

D 前田（2009）において非条件的用法に分類される条件文⁶

E 「のだったら/のであれば」「～とすれば/したら/なれば/なったら」を含むもの

F 方言⁷、および古文

Eの「のだったら/のであれば」は「～なら」に置き換えられ、事態間の因果関係ではなく、ある状況を前提に考えた話し手の判断を表すもの（鈴木1994、益岡2006）のため除外する。「～とすれば/したら/なれば/なったら」も同様に「ある事態が成立すると仮定」した場合の話し手の推論を表すものである（日本語記述文法研究会2008）ため、「～ば」「～たら」形式とは異なる形式とみなし、除外する。

上記のような例を除いたものをここでは「条件節連続文」と呼ぶことにする。また、条件節連続文の最初に現れる条件節を、本稿では「第一条件節」、2番目に現れる条件節を「第二条件節」と呼ぶ。

3.3 用例の収集

本研究では条件節連続文の用例をBCCWJの長単位検索で収集した。対象とする形式は「～ば」「～たら」および「～ば」の縮約形（～すりゃ、しなきゃ等）で、以下の設定で複数回に分けて検索した。「～ば」は語彙素「ば」で品詞を「助詞 - 接続助詞」に設定し、「～たら」は語彙素「た」で品詞を「助動詞」、活用形を「仮定形」に設定した。縮約形は語彙素を入力せず、品詞を「助動詞」、活用形を「仮定形融合」とした。いずれも「キーの条件を指定しない」にチェックを入れ、最初の条件節を前方共起1語、2番目の条件節を後方共起10語以内に設定した。対象は「国会会議録」を除く全ての媒体の非コアデータである⁸。3.1節で述べたとおり、本研究では条件形式のうち「～ば」と「～たら」を対象とするため、論理的に可能な第一条件節と第二条件節の組み合わせは、「～ば」と「～ば」、「～ば」と「～たら」、「～たら」と「～ば」、「～たら」と「～たら」の4通りとなる。

用例を検索した結果、約5500例が抽出された。ここから3.2節で提示した対象外の用法が含まれるものおよび間違っただけ抽出されたものを除外し、条件節連続文と呼べるものを830例まで絞り込んだ。1節で述べたように、条件文とは節に現れる異なる事態同士が因果関係を持つ文である。そこで、条件節に前接する言葉が事態性を持つかどうか、そして条件節が表す事態が主節を引き起こしているかという2つの観点から、これらの用例を分類した。ここでは、事態を「動作や行為、モノや人の状態の変化、一時的な状態、一時的な物の存在およびこれらの事柄の否定」と考

⁶ 「～すれば…」の様に後半部分が省略されたものも含む。

⁷ 条件表現は地域差が大きいため、方言は扱わない。

⁸ 「国会会議録」を除いたのは、文が必ずしも原稿をそのまま読んだものではなく、発話の際での変更や言い間違いもそのまま記載されているためである。これにより、文全体が適切な構造をなしていない、あるいは意味が取りづらくなることが予想されるため、対象から除外した。

えることにする。したがって、「頭が痛い」「答えがわからない」「結果を知りたい」などの心理的・肉体的な状態も事態とみなした。また、「大丈夫だ」「すむ」「OK」は、文脈から具体的な結果が推測できれば事態を表すとみなした。「彼が犯人だ」「すぐに解決できる問題」などの名詞述語文や名詞句は変化や時間的な幅を見いだせず、恒常的な性質を述べている可能性があるため、事態を表すとは判断しないことにした。分類の結果は以下のとおりである。

条件節が事態を表すもの

①第一条件節が契機的な事態を表し、第二条件節のみが主節と因果関係を持つもの…170例

(9) (再掲) 頭が痛ければ、この薬を飲めば治る。

②両方の条件節が主節と因果関係を持つもの

(ア) 2つの条件節の事態が重なって主節の事態が成立するもの…236例

(10) 急いで行けば、道が混んでいなければ間に合う。

(イ) 2つの条件節が「あるいは」「または」などを介するもの、および言い換え等のために条件節が重ねて使われているもの…112例

(11) 塾に行けば、あるいは家庭教師をつけば、合格できる。

事態を表さない・もしくは事態性を判断できない条件節を含むもの⁹…309例

(12) こんなことがあったら、普通だったらまいってしまう。

(13) 話すのが好きな子供だったら、きっかけがあればすぐに皆と仲良くなれる。

(14) 何かご意見があれば、コメントしていただければと思います。

(15) よかったら、教えてくだされば幸いです。

条件節が事態を表すもののうち、①は(9)のように第一条件節で問題となることや聞き手の希望などを条件的にさし出すタイプの文で、第一条件節と主節の間には因果関係は認められない。②の(ア)は第一条件節の事態と第二条件節の事態がともに成立しなければ、主節の事態も成立しない。例えば(10)は「急いで行く」と「道が混んでいない」ということの2つのうちどちらかでも欠けたら、「間に合う」という主節の事態は成立しない。(イ)は(11)のようなものを指す。これは(ア)と異なり、2つの条件節のうちどちらかが欠けても主節の事態が成立するものである。事態を表さないとみなすものには、(12)のようなものがある。この例の他に、「私だったら」「日本だったら」のように単体の名詞と条件形式が結びついてできる条件節も事態を表さないものとする。ただし、「雨だったら」「合格だったら」のように名詞そのものが事態性を帯びている場合には、事態を表す文に分類した。(13)～(15)は事態性の有無を判断できない文の例である。(13)のようなものは第一条件節の名詞句が人の性質を表すため、事態性があるとはっきりとは言い難い。また、(14)は第二条件節と主節で慣用化している文のため、事態性を見いだせずここに分類した。(15)のような文で見られる「よかったら」「可能であれば」「出来たら」は

⁹ ここには、事態性の判断によっては(ア)に分類され得る用例や、分析対象外とした「のであれば」「なら」の意味と重なる可能性がある用例が含まれるが、今の時点でそれを明確に区別するための方法論を確立できていないため、判断を保留することとした。

国立国語研究所（1964）では典型的な条件文¹⁰に分類されているが、主節の事態の原因となりえる事態とは言い難いため、事態性がかなり薄れた副詞的なふるまいに近いとみなし、ここに分類した。

以下では、このうちの①のみ、すなわち第一条件節が契機的事態を表し、第二条件節のみが主節と因果関係を持つものを取り上げ、その意味的構造と文法的特徴をさらに分析する。他のタイプについては、紙幅の都合上別稿で議論することとしたい。

4. 第一条件節が契機的事態を表す条件節連続文の特徴

4.1 文全体の意味的構造

①のタイプの条件節連続文の意味的構造には、大多数において次のような節同士の構造パターンが見られた。まず、問題と思われる事態や聞き手の希望、意向など、後に続く一連の出来事のきっかけが第一条件節で提示される。次に、第二条件節ではその問題を解決するための、もしくは希望を実現させるための行為が提示される。最後に、第二条件節で行った行為によりもたらされる望ましい結果が示される。なお、第二条件節の述語が否定形である場合には、主節には望ましくない結果が示される。

(16) は第一条件節で問題となる事態を、(17) (18) は聞き手の希望や意向を提示している例である。3.3 節で述べたとおり、このタイプの条件節連続文は、第一条件節と主節の間に直接的な因果関係は認められない。(16) は「じしんがあった」ことは主節の「たすかる」という事態を引き起こしておらず、(17) の「結果が知りたい」という希望も主節の「わかります」という事態の引き金にはなっていない。(18) の第一条件節「このような人々に神の言葉を伝えようと思う」という意向は、主節の「果たすことができない」という事態を引き起こしていない。

(16) この本をかりる前は、(じしんがあったら、つくえにもぐればたすかる。) と思っていたけど、(略) (実著者不明「楽しい読書感想文の書き方」)

(17) でも、場所はラスベガスで、時差の関係で放送は夜ですが、試合は終わっています。結果が知れたければ、サイト検索すればわかります。(「Yahoo! 知恵袋」)

(18) 彼らは「恥知らずで、強情な人々」です。このような人々に神の言葉を伝えようと思えば、神とのかかわりをしっかりと意識していなければ、決して果たすことができません。

(雨宮慧「旧約聖書の預言者たち」)

上記の「問題となる事態」や「希望の意向」のほか、第一条件節で表される事態には2つの類型を認めることができる。各類型の用例数を表1に示す。

¹⁰ 国立国語研究所（1964）は「～たら」「～ば」「～と」形式の条件文を「陳述的条件」（「～ばいい」「～たらどうか」など）、前おき（「～といえは」「～から考えると」など）、「客観的条件」の3つに大別し、「客観的条件」は「条件とよぶのがもっともふさわしい、きっかけ・因果関係・前提など」としている。

表 1 契機を表す条件節連続文の用例数

形式 / 主節の事態	問題	希望・意向	中立的	単なる 時間的きっかけ
～たら＋～ば	45	11	17	35
～ば＋～ば	32	11	6	0
～たら＋～たら	4	0	5	1
～ば＋～たら	2	0	1	0
合計	83	22	29	36

①の第一条件節が契機的な事態を表す用例には、問題となる事態を提示する用例（(16)）が83例、希望や意向を表すもの（(17)（18)）が22例、その他に、事態に対して話し手の態度が中立的なもの（(19)）が29例、単なる時間的なきっかけを表すもの（(20)）が36例あった。

(19) 私もそういう物を落札したら「ヤフーゆうパック」があれば嬉しいですね。

（「Yahoo! 知恵袋」）

(20) 約三十分後石膏が固まったら粘土枠を取りはずせば、外型が完成。

（実著者不明「ろくろがいらぬ陶芸」）

条件形式の組み合わせは、いずれの種類においても「～たら」＋「～ば」もしくは「～ば」＋「～ば」が大多数を占め、第二条件節で「～たら」が用いられる用例は少数であった。使用形式が偏る原因については、4.4節で触れる。

本節冒頭で述べた通り、①の用例の大部分を占める「問題となる事態」や「希望・意向」は、ともに第一条件節で解決されるべき課題を提示し、第二条件節以降でその課題を解決するための手段等を示すという構成である。そこで本稿では、この2タイプを一括して「問題・希望提示型」と呼び、以下、この「問題・希望提示型」を中心に論を進める。他の2類については、第5節で「問題・希望提示型」と対照させながら検討する。

4.2 第一条件節と第二条件節の役割の違い

問題・希望提示型の文において2つの条件節が共存できるのは、これらの条件節が異なる役割を担っているためだと考えられる。論拠として、第一条件節には「もし」が共起できるが、第二条件節には共起できないか、もしくは共起したとしても極めて不自然であるという点が挙げられる。

(21) もし地震があったら、机にもぐれば助かる。（読みやすさの観点から漢字表記に書き換え）

(22) *地震があったら、もし机にもぐれば助かる。

(23) もし結果が知りたければ、サイト検索すればわかります。

(24) *結果が知りたければ、もしサイト検索すればわかります。

(25) もしこのような人々に神の言葉を伝えようと思えば、神とのかかわりをしっかりと意識していなければ、決して果たすことができません。

(26) ?このような人々に神の言葉を伝えようと思えば、もし神とのかかわりをしっかりと意識していなければ、決して果たすことができません¹¹。

「もし」が共起するかどうかは、条件の種類によると考えられる。坂原（1985）は、条件文には前件で与えられた状況を元に主節の結果を導き出すものと、主節の結果から遡及して必要な条件を述べるものがあると述べている。次の疑問表現を伴う例を用いて、2つがどのように異なるかを示す。(27)は「頭痛が治る」という結果から遡及してその事態を実現するのに必要な条件を「どうすれば」と提示するタイプの条件である。ここでは、答えの文は「もし」をつけると不自然な文になる。(28)は「薬を飲む」という与えられた状況を元に「どうなるか」結果を述べるタイプの条件であるため、答えの文には「もし」が共起し得る。

(27) どうすれば頭痛が治る?— {Φ / ?もし} この薬を飲めば治るよ。

(28) この薬を飲んだらどうなる?— {Φ / もし} この薬を飲んだら頭痛が治るよ。

問題を提示する用例では、第一条件節が「いざとなったら / なれば」という形で現れる4例以外の用例には「もし」が全て共起した。また、希望・意向を提示する文でも、全ての第一条件節に「もし」が共起できた。

一方で、第二条件節に「もし」が共起できる用例は非常に限られており、問題を提示する用例では83例中80例で「もし」の共起ができなかった。共起可能なものは「裁判になれば証拠がなければ慰謝料請求できません」の1例のみで、やや不自然だが可能だと判断したものは「(略)ちょっとお花が悪くなったものがありましたら、ご連絡いただければお花をご用意いたします」など2例あった。これらについては、第二条件節のもつ述語の状態性、もしくは非意志性などによるものと思われるが、現時点で判断できる材料を持ち合わせていないため、今後の課題とする。希望・意向を提示する文ではすべての用例において、「もし」の共起が不可能であった。

このようなことから、問題・希望提示型の文においては、第一条件節は「もし」が共起できる、状況から結果を求めるタイプの条件、第二条件節は「もし」が共起できない、結果から遡及して必要な事態を示すタイプの条件であり、2つの条件節は一文中で異なる役割を果たしていると考えられる。

仮に2つの条件節を同じ役割を果たすように連続させると、(29) (30) のように不自然な文になる。

(29) ?問題が起きたら、自分で解決できなそうだったら、連絡してください。

(2つとも契機を表す条件節)

(30) ?ここに電話すれば、説明書を読めば、不具合の原因がわかる。

(2つとも結果を実現させるために必要な条件を表す条件節)

当然ながら、この2つの条件節は、「急いで行けば、道が混んでいなければ間に合う」のような並列的な関係でもない。並列的な関係であれば条件節同士を入れ替えられるが、問題・希望提示

¹¹ (26) は (22) (24) と比べてやや容認度が上がるが、自然とは言えない。

型の文はそれができないからである。このようなことから、問題・希望提示型の文では2つの条件節が異なる役割を担っていることが一文中の条件節連続を許容している要因の1つだと考えられる。第二条件節の条件のタイプに関しては、4.4節でさらに詳しく述べる。

4.3 第二条件節と主節の関係

問題・希望提示型の文では、第一条件節は主節と因果関係になく、2つの条件節は文中で異なる役割を担っていることがわかった。ここでは、主節の事態と因果関係にあるのは第二条件節の事態であることを、事態の不成立または逆の事態の成立の想定可能性という観点から述べる。事態同士が因果関係を持つということは、一方の事態が成立しなければ、もう一方の事態も成立しない可能性を含む¹²ということである。例えば、(31) (32) は1つの条件節と主節からなる条件文だが、第二条件節の事態が成立しなかった場合、もしくは第二条件節の事態の逆の事態が起きた場合には、主節の事態も成立しない、もしくは逆の事態が起きることが想定できる。同じように契機を提示する条件節連続文 (21) (23) (25) の第二条件節と主節の事態も (33) ~ (35) のとおり不成立となること、もしくは逆の事態が起こることが想定できる¹³。

(31) 試験に受かれば卒業できる。⇒試験に受からなければ卒業できない (可能性がある)。

(32) 雨が降らなければ試合は行われる。⇒雨が降れば試合は行われない (可能性がある)。

(33) 地震があつたら、机にもぐれば助かる。⇒机にもぐらなければ助からない (可能性がある)。

(34) 結果が知りたければ、サイト検索すればわかる。⇒サイト検索しなければわからない (可能性がある)。

(35) このような人々に神の言葉を伝えようと思えば、神とのかかわりをしっかりと意識していなければ、決して果たすことはできない。⇒神とのかかわりをしっかりと意識していれば、果たすことができる (可能性がある)。

(33) ~ (35) では第一条件節を無視して第二条件節、主節の事態の不成立を想定した文を示したが、これは、元々の文がアドバイスや解決法、手順などを示すという文脈上にある場合が多く、第一条件節を含めたまま第二条件節の述語の事態を否定しようとする、文によっては全体的に不自然、不適格な文になってしまうためである¹⁴。ここでは第二条件節と主節の関係性を明らかにすることが目的であるため、この2つの節にのみ注目して事態の連動性を観察している。また、

¹² 「pならばq」から「pでなければqでない」への解釈は誘導推論によって導かれるが、誘導推論がされるかどうかはqが成立するための他の要素の有無や、文脈などにもよるため、ここでは第二条件節の事態の不成立およびそれに伴う主節の事態の不成立を、可能性の高低によらず想定が可能かどうかについて判断する。

¹³ ただし、主節に「大丈夫だ」「造作もない」のように、主節の事態の具体性が薄まっている評価的な述語がくる場合や、第二条件節に疑問語が来る場合は、事態の不成立を想定することはできない。例：「この無政府主義者の一悪党どもは馬鹿だ、まる馬鹿だ—そんなことをしようと思つたら、爆弾を使えば造作もない。」「アイヌ語を完璧にマスターしようと思つたら、どこに行けば習ったりできるんでしょうか？」

¹⁴ (34) では、第一条件節を含めたまま第二条件節と主節の述語の肯定否定を入れ替えると、「結果が知りたければ、サイト検索しなければわからない」と不自然な文になる。

主節の述語が肯定・否定の交替で表せない場合もあるが、文脈や第一条件節において主節に来る事態が想定できれば、第二条件節と主節の事態の不成立および逆の事態の成立が想定できると判断した¹⁵。ただし、主節に「すむ」や「OK」のような評価的な述語が来る場合には逆の事態が想定しにくいので、このような文では、文脈から結果となる事態が推測できない限りは事態の不成立もしくは逆の事態の成立が想定できるとはいえなかった。これについては4.4節で詳しく述べるが、主節に具体性の薄い述語が来る場合は「～すればいい」のような当為的判断を表す表現に近づくため、節としての独立性が低くなるのだと思われる。このような場合を除き、問題を提示する文では83例中63例、希望や意向を提示する文では22例中18例において、事態の不成立もしくは逆の事態の成立の想定が可能であった。

一方で、第一条件節の事態の肯定否定は入れ替えることができない。(16)～(18)の第一条件節の述語の肯定否定を入れ替えると、「じしんがなかったら」「結果が知りたくなければ」「…伝えようと思わなければ」となる。これでは設定すべき状況が発生していないことになり、契機として伝達する意味を失ってしまう。よって、後続する文の内容も想定されなくなる。

また、条件文の事態的なつながりは、赤塚(1998)の「Desirabilityの仮説」の観点からも見ることができる。赤塚(1998)によると、話し手から見た条件節と主節が表す事態の望ましさは、つねに一致する。問題や希望を第一条件節で提示している条件節連続文を見てみると、第一条件節は他の節とは望ましさという面で必ずしも一致しないが、第二条件節と主節とは必ず一致する。(16)を例に挙げると、「じしんがあったら」という契機を受けて、「つくえにもぐる」ことの望ましさと「たすかる」ことの望ましさはともに「望ましいこと」と考えられる。(17)の場合は「結果が知りたい」という希望があれば、「サイト検索する」という事態は望ましい行為であり、また「(試合の結果が)わかる」という事態も望ましいと言える。(18)は、第一条件節で示される意向を考えたとき、「神とのかかわりをしっかりと意識していない」ことは望ましくないことであり、「果たすことができない」ことも望ましくないことで、望ましさの観点で一致している。肯定否定の連動性と、望ましさの一致という点から考えると、第二条件節と主節は条件的に結びついていると言える。

4.4 節における情報の重要度と「～ばいい」「～なければならない」との連続性

問題・希望提示型の文のもう1点の特徴は、第二条件節と主節が「～ばいい」「～なければならない」に言い換えられる点である。これは、主節の事態の情報としての重要度が高くない、もしくは完全な新情報ではないことが原因であると考えられる。

(36) 地震があつたら、机にもぐれば {助かる/いい}。

(37) 結果が知りたければ、サイト検索すれば {わかります/いい}。

(38) このような人々に神の言葉を伝えようと思えば、神とのかかわりをしっかりと意識していなければ {決して果たすことができません/なりません}。

¹⁵ 例えば、「まず、絵画史を書こうと思えば実物を見なければ話にならない」では、「話にならない」を「話になる」と言い換えることはできないが、「実物を見」れば「絵画史を書」ける可能性があるという逆の事態が想定できる。

主節には、第二条件節の行為によりもたらされる結果が示されることは4.1節で述べた。しかし、それと同時に、主節の事態は第一条件で提示された問題や希望から想起された結果をも表している。(16)の「じしんがある」という契機を受けて、地震という危機的事態から、「無事に助かる」という結果が想起される。(17)「結果が知りたい」という希望からは「結果を知る」という結果が、(18)「人々に神の言葉を伝えようと思う」という意向からは「伝えられた」「目的を果たした」という結果が想起される。つまり、このタイプの文では、第一条件節で既に主節にどのような情報が置かれるかはある程度予測可能であるため、必ずしも具体的でなくてもいいのである。そのため、主節が「いい」「ならない」のように抽象的な意味の表現になったとしても、話し手の言わんとする内容は損なわれない。そして、最も情報の重要度が高く、具体性を求められるのは第二条件節に置かれる事態であると思われる。ためしに節の事態が抽象化された文をそれぞれ作成してみると、以下ようになる。

(39) 何かあったら、この窓口で相談すればいい。

(40) どうにかしたければ、人一倍努力しなければならぬ。

(41) ?問題が起きたら、なんとかすれば大家さんが解決してくれる。

(39)(40)は第一条件節と主節の事態を曖昧にしたものである。この2つの文からは「この窓口で相談すべきだ」「人一倍努力すべきだ」という話し手の伝えたい内容がくみ取れる。しかし、第二条件節の事態を抽象化した(41)は、他の節の事態が具体的であるにもかかわらず、話し手が聞き手にどういった行為を求めているのかが見えてこない。このように、第一条件節や主節の事態は抽象化することができるが、第二条件節の事態は具体性を欠くと、話し手の伝達意図が不明瞭になる。つまり、文の情報の重要性は第二条件節が他の2つの節よりも高いと言える。

上記の点は、用いられている形式から見ても矛盾しない。問題、希望を提示するタイプ105例中、99例において第二条件節に「～ば」形式が用いられていた。

「～ば」形式が後件で表す内容と条件文の論理関係との関連について述べた研究に李(2010)がある。李(2010)は、坂原(1985)が言及した条件の種類について触れ、結果から条件に遡及するタイプの条件では「～ば」形式が用いられやすいと述べている。そうであれば、結果から条件に遡及して述べる場合、話し手が最も伝えたい内容は「どうすればそうなるか」の「どうする」の部分、つまり「～ば」形式に前接する部分にくることになる¹⁶。第二条件節が結果に必要な条件が述べられるタイプの条件であると考えれば、第二条件節の形式の多くが「～ば」に偏ることは、「～ば」の用法と話し手が伝えたい情報の重要度から考えて、当然であると思われる。このようなことから、情報の重要度が最も高いのは第二条件節であり、重要度が低い主節の事態は「いい」「ならない」などの具体的な意味を持たない述語に言い換えられると考えられる。

また、問題・希望提示型の文では、主節に「大丈夫だ」「OK」「それでいい」のように具体性が希薄で、評価的な意味の語がくる用例が12例確認できた。これらは4.3節で述べたような肯定否定の入れ替えはできず、「～ばいい」「～なければならぬ」により近い文であると思われる。しかし、2つの節が一体化していないため、第二条件節と主節の間に「きっと」「多分」などの副詞

¹⁶ 収集した用例においても、第二条件節に「どこに行けば」「何と言って断れば」などの疑問形式が来るものはあったが、主節に疑問形式が現れるものは見当たらなかった。

が挿入できる点では、「～ばいい」「～なければならない」と同じレベルまで一体化が進んでいない。つまり、主節に「大丈夫だ」「OK」のような評価的意味の表現が現れる文は、(16)～(18)のような文の第二条件節と主節とが「～ばいい」などのように一体化する途中段階に位置する例であると言える¹⁷。そして、問題・希望提示型の条件節連続文では、第二条件節と主節は「～ば大丈夫だ/OK」のような例を介して「～ばいい」「～なければならない」などの表現と連続的であると思われる。さらに、これら2つの節は意味的にはひとまとまりの事態となり、状況設定をする第一条件節の後件として、「～ばいい」「～なければならない」に近い話し手の当為的判断を表す働きを持つのではないだろうか。

5. その他の契機的事態を表す文の位置づけ

本節では「問題・希望提示型」以外の①の条件節連続文について、「問題・希望提示型」と対照させながら検討する。第一条件節が契機的事態を表す条件節連続文の用例には、第一条件節の事態が、問題となる事態や希望する事態ではなく、(42)のように単なる時間的なきっかけを表すものが37例あった。

(42) ふたをして火を通したら、残りの材料を加えていけばOK。

(実著者不明「レタスクラブ2004年4月25日号」)

問題・希望提示型の文では、第一条件節が「もし」と共起し得るという特徴があったが、時間的なきっかけを表す文は、ほとんどの例において第一条件節に仮定副詞「もし」が共起しない。これは、第一条件節がある行為を完遂するための手順として、一連の動作の契機を示しているにすぎず、必ず起こるであろう事態、つまり実現が確実視されている事態を表しているためである。以下、このタイプ文の第一条件節に「もし」を入れた際の自然さを、「自然であり、共起が可能、もしくは既に使用されている」か、「やや不自然だが可能」か、「不自然であり、共起が不可能か」の3つに分けて説明する。共起が「やや不自然」となったのは、「(植物が)伸びたら」などの3例のみであった。これは、植物が順調に伸びることなどに対し、実現が完全に確実なのかどうかの判断が難しいためであると思われる。第二条件節では、「もし」の共起が「やや不自然」としたものが1例¹⁸あったが、問題・希望提示型と同様、ほぼ全てにおいて「もし」は共起しなかった。なお、第一条件節で単なる時間的なきっかけを示す文では、第一条件節の事態からどのようなことが望ましい結果かは想起されない。

その他、中立的な事態を表す文では、29例中23例が第一条件節で「もし」が「共起が可能」、「電話がかかったら待っていれば交換手が出ます」のように手順を説明するものなど5例が「やや不自然」で、1例のみ「一度開始したら」という形のものが「もし」と共起しなかった。一方で、第二条件節で「もし」が共起するものは(19)で示した用例など3例、「やや不自然」なものは「見積もりが分かったら、お知らせ頂ければ少しは力になれるかも知れませんが」など3例あり、

¹⁷ 花蘭(1999)も「～ばいい」「～なければならない」は「～ば十分だ」「～なければだめだ」のような形式を介して通常の条件文と連続体をなすと指摘している。

¹⁸ 「岩にダイナマイトをしかけたら、すぐに断がいを飛びこえて逃げなければ爆発にまきこまれて死んでしまうのだから」

他は「共起が不可能」であった。

ここで、4.2節で論じた問題・希望提示型の結果も併せて、「もし」共起の可能性を表2に整理して示す。記号はそれぞれ「もし」をつけたときに自然かどうかの程度を表し、横の数字はその用例数を表す。

表2 契機を表す条件節連続文の「もし」共起の可能性

第一条件節の意味	問題 83例	希望・意向 22例	中立的 29例	時間的きっかけ 36例
第一条件節に 「もし」が共起するか	○ 79 △ 0 × 4	○ 22 △ 0 × 0	○ 23 △ 5 × 1	○ 0 △ 3 × 33
第二条件節に 「もし」が共起するか	○ 1 △ 2 × 80	○ 0 △ 0 × 22	○ 2 △ 3 × 24	○ 0 △ 1 × 35

○…自然であり、共起が可能、もしくは既に使用されている △…やや不自然だが可能

×…不自然であり、共起が不可能

中立的事態を表す条件節連続文においては、第一条件節に「もし」が共起し得る用例が大多数を占めるため、問題・希望提示型と同様に第一条件節が状況から結果を求めるタイプの条件、第二条件節が結果から遡及するタイプの条件が並ぶ構造であるとみていいだろう。ただし、中立的に述べられる事態を表す文については共起の自然さの偏りが「問題・希望提示型」ほど顕著ではなく、傾向にややばらつきがあるため、さらなる分析が必要である。

単なる時間的きっかけを表す文は、第一条件節が表す事態の仮定性が薄れているために「もし」が共起しにくい。これらの文では、第一条件節の条件性が薄れ、後続する事態との時間的な前後関係を表す意味合いが強くなるためであると思われる。これは第一条件節に用いられる条件形式からも説明できる。第一条件節に単なる時間的きっかけとなる事態がくる用例では、4.1節に示した表1のとおり、36例中35例が第一条件節が「～たら」、第二条件節が「～ば」になる組み合わせで、「～たら」同士の組み合わせが1例と、第一条件節に「～ば」がくるものは皆無であった。「～たら」が仮定的な意味よりもむしろ継起的な意味を強く持つことはすでに言語学研究会・構文論グループ(1985a)で指摘されている。第一条件節で実現が確実視される事態が表される場合は仮定的な意味が薄れるため、「～たら」が用いられやすいのだろうと考えられる。

4.3節で述べた、第二条件節と主節の事態の不成立/逆の事態の成立の連動可能性については、問題・希望提示型では大多数が可能であったのに対し、中立的事態、単なる時間的きっかけのいずれにおいても可能なものあるいは不可能なものがおおよそ半分ずつであった。これは、このタイプの条件節連続文では手順や経路案内などを目的とした文が多く、逆の事態を想定しにくいこと、主節に「OK」「安心だ」などの評価的な述語が来るか「完成」「できあがり」「入力完了」などの手順の完了を示す言葉が多く、事態の具体性が低かったことが原因であると考えられる。また、4.4節で述べた「～ばいい」「～なければならない」への言い換えの可能性については、中立的事態を表す文では可能なものと不可能なものへの顕著な偏りは見られず、文脈で望ましい結果が示

されていれば可能であるが、そうでない場合には言い換えは不可能であった。単なる時間的きっかけを表す文では、第一条件節は単に第二条件節との時間的前後関係を表しているため、問題・希望提示型と異なり望ましい結果が想起されにくく、文脈上に何を目的としているかが示されていない限り、言い換えは不可能であった。観察の結果を表3に示す。

表3 契機を表す条件節連続文の「逆の事態」の想定可能性、および「～ばいい」などへの言い換え可能性

第一条件節の意味	問題 83例	希望・意向 22例	中立的 29例	時間的きっかけ 36例
第二条件節と主節の 事態の不成立/逆の事態の 成立が想定できるか	○ 63 △ 6 × 14	○ 18 △ 0 × 4	○ 17 △ 0 × 12	○ 18 △ 4 × 14
「～ばいい」 「～なければならない」に 言い換えられるか	○ 76 △ 2 × 6	○ 20 △ 2 × 0	○ 13 △ 6 × 10	○ 7 △ 4 × 25

○…可能 △想定・言い換えがややしにくい、文脈からの推測によりある程度可能 ×…文脈から推測できず、不可能

6. まとめと今後の課題

本稿では、条件節が連続して現れる文のうち、第一条件節が主節と因果関係を持たずに契機的な事態を表すもの、特に「問題・希望提示型」を対象として意味的構造と文法的特徴を分析した。これにより、以下のことが明らかになった。

- ①問題・希望提示型は、問題となる事態や聞き手の希望などが仮定的に第一条件節で提示され、それに対応する行為が第二条件節で、第二条件節の条件成立によりもたらされる結果が主節で示されるという意味的構造パターンを持っている。
- ②問題・希望提示型は、第二条件節と主節が条件的に結び付けられており、「～ばいい」「～なければならない」などの評価的用法と連続的である。
- ③問題・希望提示型は、文中の情報の重要度が最も高い第二条件節に「～ば」形式が用いられやすい。

③は問題・希望提示型のみならず、第一条件節が契機を表す条件節連続文全体に共通して言えることである。第一条件節で単なる時間的きっかけを表す文では、第一条件節が、実現が確実視される事態を提示していること、および主節の事態を想起させないことから、①②は当てはまらない。第一条件節の事態に対して話し手の態度が中立的な文は、問題・希望提示型と単なる時間的きっかけを表す文の中間的なものと考えられるが、今後さらなる分析が必要である。

紙幅の都合上、2つの条件節ともが主節と因果関係を持つ用例、および「～と」などの別形式、事態性がない、あるいは低い条件節を含む用例に関しては言及できなかった。これらの条件節連続文のどのような要素が条件節の連続を許容するのか、また、内容にはっきりとした事態性が認められない条件節はどの程度条件節らしさを保っているのか、さらに各種の条件節連続文は互い

に、もしくは慣用化された条件表現などどのような関係を持つのかについての分析は、今後の課題としたい。

参考資料

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」国立国語研究所
<https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search>

参考文献

- 赤塚紀子（1998）「条件文と Desirability の仮説」赤塚紀子・坪本篤郎（著）『モダリティと発話行為』 pp.13-46, 研究社出版
- 有田節子（1999）「プロトタイプから見た日本語の条件文」『言語研究』 115, pp.77-108, 日本言語学会
言語学研究会・構文論グループ（1985a）「条件づけを表すつきそい・あわせ文（1）—その1・まえがき—」
『教育国語』 81, pp.19-31, むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ（1985b）「条件づけを表すつきそい・あわせ文（3）—その3・条件的なつきそい・あわせ文—」『教育国語』 83, pp.2-37, むぎ書房
- 国立国語研究所（1964）『現代雑誌九十種の用語用字〈第3分冊〉』, 国立国語研究所
- 坂原茂（1985）『日常言語の推論』, 東京大学出版会
- 鈴木義和（1994）「条件表現各論—バ/ト/タラ/ナラー—」『日本語学』 13-9, pp.81-91, 明治書院
- 寺村秀夫（1981）『日本語の文法（下）日本語教育指導参考書5』, 国立国語研究所
- 日本語記述文法研究会（2008）『現代日本語文法6 第11部 複文』, くろしお出版
- 花蘭悟（1999）「条件形複合用言形式の認定」『国語学』 197, pp.90-104, 国語学会
- 前田直子（2009）『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』, くろしお出版
- 益岡隆志（1993）「条件表現と文の概念レベル」, 益岡隆志（編）『日本語の条件表現』, pp.23-39, くろしお出版
- 益岡隆志（2006）「日本語における条件表現の分化」, 益岡隆志（編）『条件表現の対照』, pp.31-46, くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法・改訂版』, くろしお出版
- 南不二男（1974）『現代日本語の構造』, 大修館書店
- （1993）『現代日本語の輪郭』, 大修館書店
- 李光赫（2010）「バ条件文の期待性と必須条件」『国語学研究』 49, pp.31-43, 東北大学大学院文学研究科国語学研究室

付記

本研究は科学技術振興機構（JST）「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」（JPMJFS2110）の支援を受けたものである。

（いしばし ゆうこ 東京外国語大学大学院総合国際学研究所国際日本専攻 博士後期課程）

An Analysis of Complex Sentences with Consecutive Conditional Clauses “-Ba” and “-Tara”:

With a Focus on the “Problem and Desire Expression” Types.

ISHIBASHI Yuko

KEYWORDS: conditional sentence, consecutive conditional clauses, evaluative use of conditional forms, importance of information

This paper is a study of sentences containing consecutive conditional clauses in the “-Ba” and “-Tara” forms. It focuses on sentences where one of the conditional clauses lacks a causal relationship with the main clause, especially, among them, where the first clause expresses problems, desires, or intentions. This research uses corpus examples to analyze the semantic structure and grammatical features from perspectives such as “co-occurrence of an adverb ‘Moshi’” and “the possibility of paraphrasing into forms like “-Baii” or “-Nakerebanaranai”, which describe the speaker’s judgement.

As a result, it becomes evident that the first conditional clause in the sentence serves to establish situations as the temporal triggers of events, while the other conditional clause indicates the necessary conditions for the main clause’s event. These clauses play different roles within the sentence. Furthermore, sentences with this semantic structure often connect to expressions like “-Baii” and “-Nakerebanaranai”. The predominance of “-Ba” in the second conditional clause is influenced by the importance of the information conveyed by the clauses and the nature of conditional forms.